



平成23年度 北中物語

平成23年4月27日第4号

文責:校長 中村 裕子

【PTA年度初め総会資料・・・挨拶に代えて】

新年度、早くも1ヶ月、加速もリセットも今が好機！
ただただ子ども達の幸せを・・・そこで、これだけは大人として心しましょう。

☆ その1 篤姫母が入城する娘へのはなむけとした言葉がこれでした。

「片方聞いて沙汰するな」



物事を判断するとき、賢明な大人なればこういう姿勢を。



子どもを育てているときは特に大切。

- ・子ども同士の関係
- ・学校との関係
- ・保護者間の関係
- ・子どもの要求
- ・進路情報 等々

☆ その2 学習も大切、部活動も大切、人間関係も大切

⇒ 全体美のある子どもに

「中学生時代だけよければいいのではない。。。たった3年間、されど3年間」



悩みも涙も葛藤も、この時代には必要なこと。

テストでよい成績をあげることは大切、しかしそれだけでよいか・・・。
部活動で勝つことも大切、しかしそれだけでよいか・・・。
友だちがたくさんいることも大切、しかしそれだけでよいか・・・。



この全てに努力をさせる。(そして成果を実感させる)

間違っても、「勉強だけしていればいい」「部活動で高校へ行こう」とはならぬように・・・。

→ こういう姿勢を受けて育った子どもは先細り傾向に・・・。

以上のお願いについては、我々教職員も心してまいります。我々も指導力・人間力とも不十分さは承知しております。だからこそ、わたし達は保護者の皆様と一緒に成長していきたいと考えています。つまり、皆様と学校は「同志」なのです。「よい子どもを育てたい」という思いを同じにする大人が手を組むことで、子どもの可能性がさらに広がると思いませんか・・・。

子どもへの「本当の愛」

少し古い話になりますが、数年前に大ヒットした映画で「ALLWAYS 3丁目の夕日」という映画がありました。この映画には幾つかのテーマがあり、それぞれに泣かせるのですが、私は青森から集団就職で東京に出てきた少女、六子の話が一番心に残り、いまだによく覚えています。それはこんなストーリーでした。

東京の下町の家族でやっている小さな自動車修理工場に就職した六子は、素直で明るくがんばり屋でした。帰省を勧めてもなかなか帰りがらない六子に工場の社長は、クリスマスプレゼントに青森までの往復切符を用意しました。

しかし、六子の様子がおかしいのです。そして六子は、「私は捨てられた」「居ない方がいい」などと言いながら、青森には絶対に帰らないと宣言するのです。さらにその理由をこう言いました。自分が東京へ出てくる時に母親から「帰ってきてもお前の居場所はない」「口減らしができてよかった」と言われたというのです。

その時でした。薬師丸ひろ子演ずる工場の社長の妻が、たくさんの長い手紙を持ってきて少女に見せました。それは娘を案じ、内緒で毎月雇い主に送ってきた母からのものだったのです。それは、娘には絶対に見せないでくれと頼まれていたのです。

六子の母は、15歳の娘に里心がつかないように、つらくともそこでがんばれるように、心の中では泣きながら、あえて突き放して家から送り出したのでした。そして、六子は、社長の妻に「子どもがかわいくない親なんてどこにもいないんだよ」と優しく諭され、大急ぎで上野駅に向かったのです。

私は、自分の子育てのためにも、もう少し早く観ておきたかったと思うくらい感動したのを覚えています。何不自由なく育っている現在の子どもたちに欠けているものが、この厳しい愛情かもしれません。「親の今の気持ちを抑え、この子が大人になるために、この子が幸せになるために」とそれだけを考え、涙をこらえ心を鬼にしてもやるべきことはやる。この愛こそが、これからの大人へ成長していく思春期の子どもたちには必要な、「本当の愛」ではないかと、考えさせられた映画でした。

親業は苦しくも楽しい・・・楽しくも苦しい・・・これ実感ですよ。でも、この楽しい、苦しいを通して、親も人間として成長できているのです。これ、子育てに悩んだり苦しんだりしたことのある私の経験上からも言えます。

思春期真っ只中の子どもを持つ親の時代を楽しみましょう。。。前向きに相談してくだされば、学校はいくらでも力になりますから・・・。



